

生産性向上実現プログラム取組事例発表会を開催

〔資源活用課〕中部森林管理局では、同局大会議室(2月28日)と木曾森林管理署多目的ホール(3月1日)の二会場で、管内の素材生産事業体や県等から約120名、局署関係者約110名、総勢約230名の参加者を得て「生産性向上実現プログラム取組事例発表会」を開催しました。

生産性向上実現プログラムとは、国有林で発注する素材生産請負の事業地で、各署等一箇所のモデル事業地(全11箇所)を選定し、素材生産能力の高い事業体を育成することを目的に実施しているものです。具体的には、木材の伐採から玉切り造材、運搬までの一人一日当たり作業量の目標を示す目標生産性を設定し、作業員一人一人の作業日報の作成による工程毎の生産量の把握・分析を各日から数日単位のサイクルで行い、作業システムの改善によりボトルネックの解消を図る取組です。また、事業期間中は、受注者と発注者である国、民有林を指導している県の出先や研究機関が共同で、事業の節目に現地検討会も含めたPDCA会議を行っており、平成27年度から実施しています。

本発表会では、地域の林業事業体の底上げとなる普及活動の一環として、今年度の優良な取組事例について発表を行いました。最優秀賞を受賞した金山林業(有)では、生産(材)の流れを止めない作業仕組みによる生産性の向上を目指して、作業手を固定しないマルチ技能者の育成及び機械を遊ばせない人員配置から人を遊ばせない人員配置への転換により、目標生産性7m³/人日に対し14m³/人日と、非常に高い生産性を達成しました。優秀賞を受賞した南ひだ森林組合では、ヒノキ高齢級人工林の優良材が期待できる事業地で、軟弱な地質条件によりチェーンソーによる手造材と小型林業機械での集造材作業となったが、生産する丸太の品質の確保と生産性の向上を両立させて8m³/人日の生産性を達成しました。同じく優秀賞を受賞した平澤林産(有)では、二回目以降の間伐が容易に実行できるよう測量により伐採列を一定方向で揃える取組やドローンによる上空からの事業地の確認、進捗管理の取組に加え、熱中症対策として小型ファン装着の空調服の着用など安全面での取組も評価されました。



優良事例を発表

林野庁では、今後の十年間で生産性を倍増するとの目標を掲げ、当局が先駆けて取り組んできたこの生産性向上の取組が、現在、全国各地の森林管理局で取り組まれているところです。

中部森林管理局では、全国に先駆け取り組んできた本取組を更に進めて、生産性だけでなく有利採材や安全な労働環境の改善も含め現地指導を行い、意欲と能力のある林業経営体を育成し、林業を「儲かる産業」とできるよう、平成30年度も引き続き生産性向上実現に向けた取組を行うこととしています。

詳細は中部森林管理局HP (<http://www.rinya.maff.go.jp/chubu/>) をご覧ください。